🕮 図書館だより Y ぶらりー 🕮 横浜商業高等学校 2025年度 第2号

一日の中でも晴れたり雨が降ったりとコロコロ変わる天気に悩まされます。長い傘を持つべきか、カバンに入れたままの軽量の折り畳み傘でよいか、日傘兼用のものにすべきか、風が強くなりそうだから重いけれど頑丈な折り畳み傘にするか、今どきは傘ひとつでも選択肢がいくつもあるということに朝から驚かされます。これは傘を開発している企業努力の結実ということでしょうか。そのような事例が『ナラティブカンパニー企業を変革する「物語」の力』本田哲也（674 ホ）に書かれています。自分が欲しいものを作るためにナラティブ（物語）の力が生きてユーザーを引き込む力に変わっていくという話はマーケティングの勉強にも役に立ちそうです。　司　書

夏休みの特別貸出　が始まりました！

夏休み前の特別貸出期間となりました。

返却は　**８月２９日（金）まで**　貸出し冊数　**無制限**　です！

たくさんの本に触れて、充実した夏休みが過ごせますように！

🕮　第71回 青少年読書感想文コンクール　🕮

今年の**読書感想文の課題図書**が発表されました。課題図書やお気に入りの本の感想を文章にしてみませんか。読書感想文コンクールサイトから、課題図書の紹介文を引用しました。本の内容と見どころ、課題図書への選定理由を載せましたので、本選びの参考にしてください。

締め切り日は夏休み明けの **9 月 19 日（金）**です。



〇名取佐和子『銀河の図書室』（913.6 ナ）

宮沢賢治の言葉を残して、突然学校から消えてしまった先輩。その謎を追う高校生たちの今を瑞々しく描く、傑作青春小説。

【みどころ】

高校の図書室で宮沢賢治を研究する弱小同好会・イーハトーブ部。部長だった風見先輩はなぜ突然消えてしまったのか――――先輩が残した「ほんとうの幸いは、遠い」というメッセージに秘められた謎が、深く心に響きます。

【選定理由】

先輩の不登校の謎にせまるため、宮沢賢治の作品を読み解く過程に賢治へのオマージュがこめられ、登場人物たちそれぞれが抱えている背景から、さまざまな角度の読書感想文が期待できる。



〇ヴィーラ・ヒラナンダニ『夜の日記』（933 ヒ）

イギリスからの独立とともに、分かれてしまった祖国。少女と家族は安全を求めて、長い旅に出た。ニューベリー賞オナー賞受賞作！

【みどころ】

ちがう宗教を信じる者たちが、互いを憎みあい、傷つけあっていく。安全を求め旅に出た家族。自分の思いをことばにできない少女は亡き母にあてて、揺れる心を日記につづる。『アンネの日記』をほうふつとさせる傑作。

【選定理由】

主人公の日記が『アンネの日記』を彷彿（ほうふつ）とさせ、日本人にとって縁遠い宗教問題や、高校生にとってのアジア史を知り、世界を知ることができる作品。さまざまな気づきを得た読書感想文が期待される。

〇五十嵐大『「コーダ」のぼくが見る世界：聴こえない親のもとに生まれて』（369 イ）

もし、親の耳が聴こえたら――なんて、想像もつかなかった。言葉やコミュニケーションの本質、「善意による差別」って何だろう？

【みどころ】

聴こえない／聴こえにくい親のもとで育つ聴こえる子ども＝「コーダ」。ろう者と聴者のはざまで生きる経験を通じ、言語やコミュニケーションの大切さ、自分と異なる人の立場を想像する難しさを知るノンフィクション。

【選定理由】

聴覚障がいの親のもとに生まれた子どもたち「コーダ」を取り上げたノンフィクション。著者の経験から、コミュニケーションとは、言語とは何かを高校生に考えてほしい一冊。



🕮　夏を感じる本　🕮

タイトルに「夏」が入っている本、いかにも「夏」っぽい本を、あれこれ集めてみました。ほっとする本も、怖い本も、考えさせられる本も、どれも高校生の夏に手に取ってもらいたい本ばかりです。

〇いぬじゅん『夏にいなくなる私と、17 歳の君』（B913.6 イ　文庫コーナー）

きゅんきゅんしたり、せつなくなったり、ほろりとしたりする物語が好きな生徒にぴったりの恋のお話です。難病の女子高生と転校生の男の子が行く七夕まつりは定番の展開。ラストまでやさしさのあふれる物語です。

〇早見和真『あの夏の正解』（B913.6 ハ　文庫コーナー）

コロナ禍で、春のセンバツも夏の甲子園も中止になった 2020 年に、甲子園常連の強豪校の選手や指導者に向きあって丁寧にことばを拾い集めたノンフィクション作品です。あのときの辛さや心のゆらぎ、もの悲しさはすっかり息をひそめましたが、普通に部活動ができることが当たり前ではなかった日があったことを忘れないためにも、今日を感謝して過ごす一日にするためにも、手にとってもらいたい一冊です。

〇東野圭吾『真夏の方程式』（B913.6 ヒ　文庫コーナー）

東野圭吾のガリレオシリーズの一冊で、玻璃が浦という架空の海辺の町が舞台になっています。小学 5 年生の恭平が夏を過ごす親戚の旅館で殺人事件が起き、映画版で福山雅治が演じている湯川博士が事件を解明していきます。読み応えのある上質なミステリーです。

〇夏目漱石『夢十夜・草枕』（B913.6 ナ　文庫コーナー）

夏の夜には怪談話だよね、という方に、夏目漱石が語る１０の夢の話をおすすめします。ただ、夜に読んだらきっと怖すぎてトイレに行けなくなります。



〇瀬尾まいこ『君が夏を走らせる』（B913.6 セ　文庫コーナー）

夏のあいだ、先輩の赤ちゃんの子守を任された金髪の高校生が主人公のお話です。夏休みの読書にぴったりの、優しい気持ちになれて、ちょっと泣けて、元気をもらえる一冊です。

〇羊の目。『おひさまとえんぴつ』（726 ヒ　マンガコーナー）

夏の話が出てくるわけではないのですが、表紙にいっぱい描かれたひまわりが夏を感じさせます。
本が大好きな耳の聴こえない沙希ちゃんが、大きくなって夢をかなえるまでのあたたかなお話のマンガです。
やさしさにあふれたエピソードは力強さも感じられて、私も頑張ってみようという気持ちになりました。

〇原民喜『夏の花』（B913.6 ハ　書庫文庫コーナー）

広島での被爆体験を描いた作品です。昨年度にこの本で読書感想文を書いた他校の生徒の作品を読む機会があり、手にしました。原爆が落ちたあとの惨状が淡々と描かれています。感想文には、むしろその冷静さが、辛い現実をまざまざと見せつけてくるようだと書かれていましたが、まさにそのとおりに作者の苦悩が静かに伝わって、確実に胸に残る言葉がありました。

🕮　今月のおすすめ本　🕮

〇 キム・ナンジ：文　チェ・ナミ：絵　山口さやか・古川綾子：訳
『まめさん こめさん おふろのひ！』岩崎書店（E キ　絵本コーナー）



タイトルだけでもとびきりかわいい、韓国発の絵本を紹介します。
この絵本の翻訳をされた山口さやかさんは、Ｙ校生の保護者の方です。翻訳をするにあたって、韓国語では韻を踏んでいたことばを日本語に訳すときにどう表現しようと試行錯誤を繰り返したことを聞きました。 元がどんなふうに書かれていたのかは想像もつかないのですが、絵を活かし、原文のイメージをこわさず、文化や慣習も考えて言葉をつむぐ翻訳作業はおそらくとても大変で、でもきっと楽しかったのだろうと思わせてくれる様子がこの本からあふれています。とんがりあたまの つんつん そばのみさん、もっちり もちもち もちごめさん、きびきび きびのみさん、くろいよろいの くろまいざむらいなど、登場するまめさん、こめさんたちの名前を口にするだけでも、とても耳に心地よくて、おいしいごはんをげんきもりもり食べたくなりました。若い時から言語に興味があってさまざまな言葉に触れ、今は韓国語に行きついてこの仕事に出合ったことなど、Ｙ校生が興味津々になりそうなエピソードもうかがいました。絵本コーナーで、ぜひ手に取ってお楽しみください。

🕮　Ｙ校図書館で保管している資料について　🕮

図書館には、Ｙ校が明治 15 年に創立して以来、その歴史を語る資料が戦火や震災を逃れて数多く大切に保管されています。図書館だよりＹぶらりーの中のＹ校アーカイブというコーナーで、貴重な資料を少しずつ紹介しています。今までのＹ校アーカイブはホームページからご覧ください。

Ｙ校アーカイブ - 横浜商業高等学校



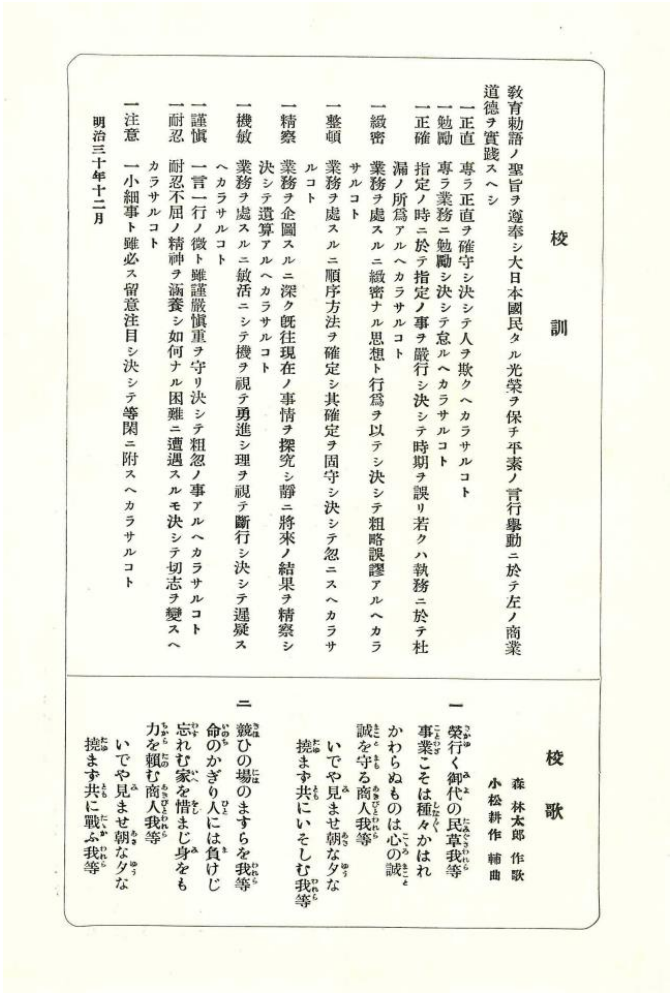
Y校アーカイブ vol. 31 「校歌の謎」

Y校の校歌は、森林太郎（森鷗外）作詞・小松耕輔作曲によるもので、大正5年（1916年）に制定されました。
この校歌の歌詞について、Y校と横浜市立大学の合同の同窓会組織である「進交会」におたずねがありました。
『校歌の2番の歌詞「競ひの場のますらを我等」の「競ひ」の部分には「きほひ」とふりがなが振ってある。今まで「きそい」と歌ってきたが、本来は「きほひ（きおい）」と歌うのではないか』という質問に、進交会の方がお手元の資料などで確認されたと聞き、Y校図書館で保管している資料でもわかることがないか調べました。
（文中の「森鷗外」の名前の「鷗」の字の表記を、文字化けを避けるため新字の「鴎」で統一し、敬称を略しました）

＜周年誌の校歌＞

図書館に所蔵のある、校歌制定後の周年誌の校歌のページを確認しました。
その中で一番古い、昭和8(1933)年の『Y校五十周年記念誌』に、歌詞のみが掲載され、「競ひ」の文字には「きほ(ひ)」と振り仮名が振ってあります。
以後、七十年、八十年、九十年、百年、百十年、百二十年、百三十年、百四十年の周年誌を確認しましたが、楽譜があるものも無いものも含め、すべて「きほ(ひ)」となっていました。

『Y校五十周年記念誌』 昭和 8(1933)年



校訓

教育勅語ノ聖旨ヲ遵奉シ大日本國民タル光榮ヲ保チ平素ノ言行擧動ニ於テ左ノ商業道徳ヲ實踐スヘシ

一正直　專ラ正直ヲ確守シ決シテ人ヲ欺クヘカラサルコト
一勉勵　專ラ業務ニ勉勵シ決シテ怠ルヘカラサルコト
一正確　指定ノ時ニ於テ指定ノ事ヲ嚴行シ決シテ時期ヲ誤リ若クハ執務ニ於テ杜漏ノ所爲アルヘカラサルコト
一緻密　業務ヲ處スルニ緻密ナル思想ト行爲ヲ以テシ決シテ粗略誤謬アルヘカラサルコト
一整頓　業務ヲ處スルニ順序方法ヲ確定シ其確定ヲ固守シ決シテ忽ニスヘカラサルコト
一精察　業務ヲ企圖スルニ深ク既往現在ノ事情ヲ探究シ靜ニ將來ノ結果ヲ精察シ決シテ遺算アルヘカラサルコト
一機敏　業務ヲ處スルニ敏活ニシテ機ヲ覩テ勇進シ理ヲ覩テ斷行シ決シテ遲疑スヘカラサルコト
一謹愼　一言一行ノ微ト雖謹嚴愼重ヲ守リ決シテ粗忽ノ事アルヘカラサルコト
一耐忍　耐忍不屈ノ精神ヲ涵養シ如何ナル困難ニ遭遇スルモ決シテ切志ヲ變スヘカラサルコト
一注意　一小細事ト雖必ス留意注目シ決シテ等閑ニ附スヘカラサルコト

明治三十年十二月

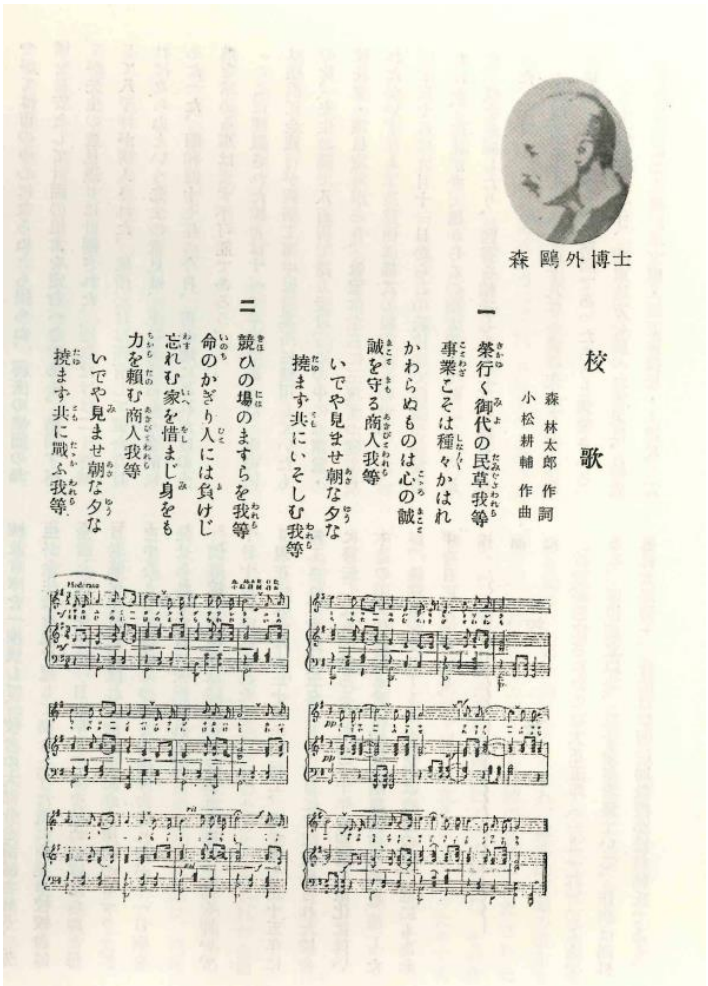
校歌

森林太郎作歌
小松耕輔作曲

一 榮行く御代の民草我等
事業こそは種々かはれ
かわらぬものは心の誠
誠を守る商人我等
いでや見せ朝な夕な
撓まず共にいそしむ我等

二 競ひの場のますらを我等
命のかぎり人には負けじ
忘れむ家を惜まじ身をも
力を頼む商人我等
いでや見せ朝な夕な
撓まず共に戰ふ我等

『Y校九十周年記念誌』 昭和 47(1972)年



森鷗外博士

校歌

森林太郎作詞
小松耕輔作曲

一 榮行く御代の民草我等
事業こそは種々かはれ
かわらぬものは心の誠
誠を守る商人我等
いでや見せ朝な夕な
撓まず共にいそしむ我等

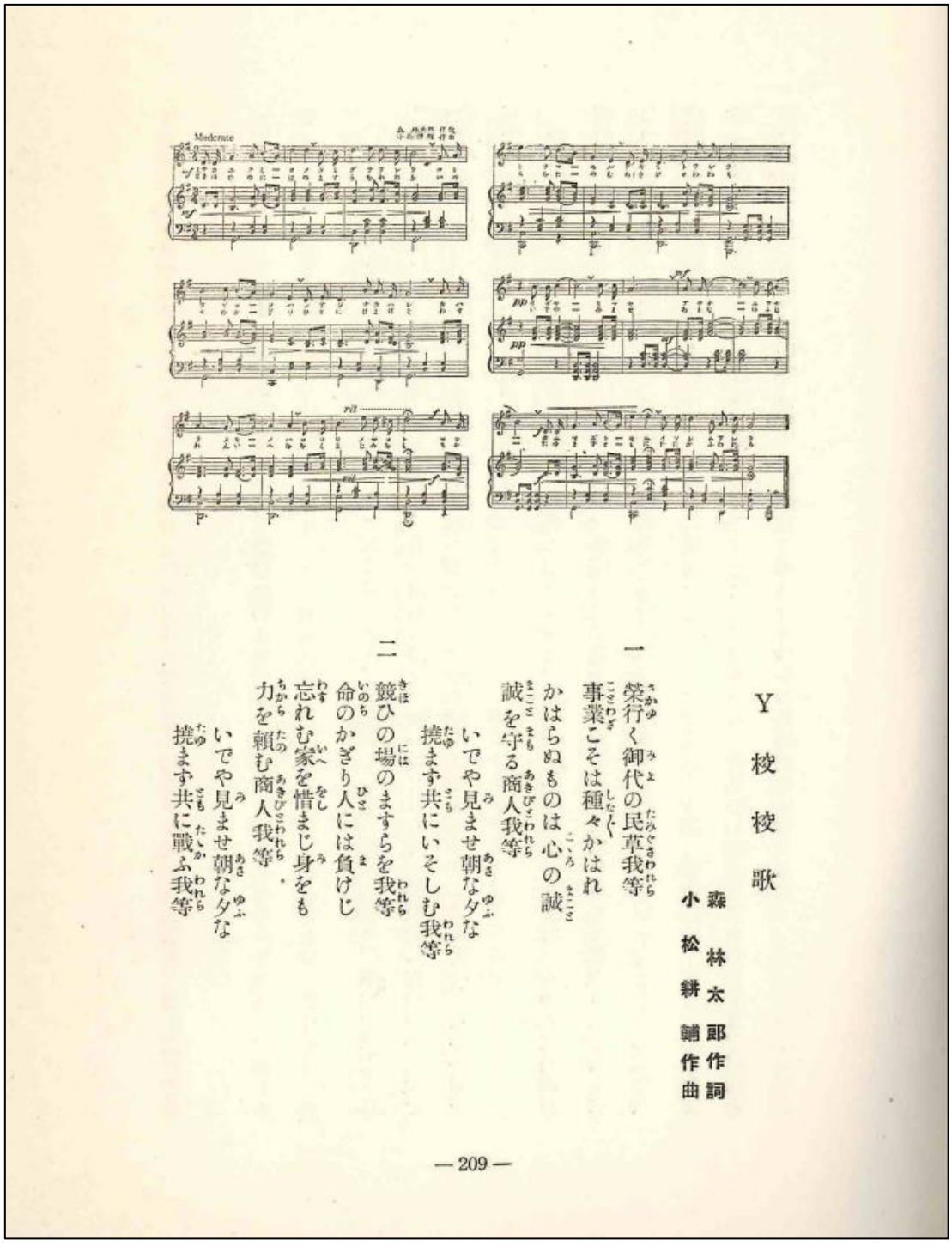
二 競ひの場のますらを我等
命のかぎり人には負けじ
忘れむ家を惜まじ身をも
力を頼む商人我等
いでや見せ朝な夕な
撓まず共に戰ふ我等

＜『美澤先生』の中の校歌＞

大正12(1923)年に亡くなられたY校初代校長の美澤進先生を偲び、昭和12(1937)年に『美澤先生』という本が刊行されました。その中に、4ページにわたって校歌について書かれたページがありました。

「森鴎外博士作の校歌制定　―博士、深く先生に傾倒さる―」というタイトルがつき、大正5(1916)年4月の職員会議で「校歌を制定しては」という議が上がったこと、森鴎外のもとを美澤先生が訪れて校歌を依頼したときの様子、美澤先生が校訓と学則を前にして「商人たるものは」と森鴎外に語ったこと、3週間後に校歌を受け取りに行った武井武次郎教諭に森鴎外が語った美澤先生像、そして森鴎外から「作曲を小松耕輔氏に」と紹介があったこと、小松氏が「できあがった校歌を木版に起こして置かれては」と提案してくれたことなどが書かれています。続くページには楽譜と歌詞が掲載されています。 この楽譜が文面にある芝愛宕下の彫刻師に彫ってもらった楽譜かどうかはわかりません。楽譜、歌詞のどちらも「きほ(ひ)」となっています。

『美澤先生』 昭和12(1937)年1月



Y校校歌

森林太郎作詞
小松耕輔作曲

一

榮行く御代の民草我等
事業こそは種々かはれ
かはらぬものは心の誠
誠を守る商人我等
いでや見ませ朝な夕な
撓ます共にいそしむ我等

二

競ひの場のますらを我等
命のかぎり人には負けじ
忘れむ家を惜まじ身をも
力を頼む商人我等
いでや見ませ朝な夕な
撓ます共に戰ふ我等

森鷗外博士作の校歌制定

―博士、深く先生に傾到さる―



森鷗外博士

森鷗外博士作、小松耕輔氏作曲の校歌が制定されたのは、大正五年であつた。その年の四月頃、職員會議の席上で、校歌を制定しては如何との議が、一職員から提案された。先生は、廻轉椅子に、やや左方へ身體を傾けながら、至極機嫌よく聽いて居られたが、この提案を即座に採擇され、早速考へて見ませうと言はれた。先生は重ねて、作歌を誰に依頼するかに就て一同の意見を徵せられた。すると、或職員から、森林太郎博士を煩はしてはどうでせうとの提議が出た。先生は、鷗外博士にお願ひ出來れば非常に結構であると贊成された。

先生が單身上京して、博士を訪問されたのは數日後であつた。博士は先生の申出を聽かれて言下に快諾を與へられた。それから二三日の後先生は敎諭武井武次郎氏を同伴し、再度博士を訪問して、作歌資料を

示された。それは校訓と學校の規則とであつた。學校の敎育方針は、ペンと劍であるとの先生の意圖を、其儘示顯したものは校訓であり學則であるから、その精神を酌入れて、校歌が作られるのは當然のことである。

鷗外博士邸の玄關には、向つて右の端に口徑八寸ばかりの、錆びた半鐘が釣下げられてあつた。その下には、撞木が備へ付けられて、訪問者は之を打つて、訪問の合圖をするやうになつてゐた。武井氏は直ちにカンカンと鐘を叩いた。餘り冴えた音ではなかつたが、流石に博士の邸宅らしい、一種幽玄な氣分に打たれた。博士は今しがた歸られたところであつたか、軍服姿で玄關に立つてゐられた。先生を一目見ると、やアと氣輕に挨拶されて、どうぞお上り下さいと言はれた。

和服に着換へられた博士と先生とは、靜かに對坐された。一通り挨拶がすまされると、先生は早速校訓と學則を博士の前に差出された。さうして先生は、大要左の如く語られたのであつた。

「苟くも商人たるものは、昔の武士と同樣であります。正直で言行一致の決心で行かねばなりませぬ。失敗しても意氣銷沈せず、飽くまでも剛毅な氣性がなければいけませぬ。故に私は、正直を身の寶として、常に事に當つては、不退轉の大勇猛心を持し、旭日旗の進むところ、世界の商戰場裡に起つて、各國人を向ふに廻し、商氣縱橫、國家のため獻身的に奮鬪し、彼等外人に一歩も讓らぬ堅實なる商人を養成致

したいと存じますので、その方針の下に、此校訓を昧朝生徒に讀聞かせて居ります」

鷗外博士は、默々と首肯きつつ先生の語られるを傾聽されてゐたが、やがて徐ろに口を開かれて、まことに御同感です、よく判りました、早速作りませう、と言はれた。その日先生と武井氏とは、晝食の饗應を受け、三週間の期を約して博士邸を辭したのであつた。

三週間の後、武井氏は先生の使者として、再び博士を訪れたが、尙四五日待つて貰ひたいとのことであつた。博士はその時武井氏に對し、橫濱商業學校のことは豫てより存じて居る、一年志願兵を多數出されるので、學校の名前は知つて居つたが、美澤先生にお目にかかつたのは、今度がはじめてである。まことに御立派な方である。Y校はよい校長を得られたものである。生徒の仕合せはどれ程であらう。あの方ならば、こちらから進んで作つて上げたいと思ふ。あなた方も、よく御面倒を見て上げて下さい、得難い方である……と申されたのであつた。流石に鷗外博士の見るところは高かつた。Y校はよき校長を得た、得難き方であると言ひ、あの方ならば、こちらから進んで作つて上げたいとまで言はれたのである。先生の飾らざる率直の辯、眞摯熱心なる態度に、博士は心から敬服されたのである。

武井氏は、五六日を經て三度び博士邸を訪問した。歌詞は既に脫稿してゐたが、作曲のため學習院女子部の、小松耕輔氏の手許へ廻してあるとのことであつた。博士は小松氏への紹介狀を書かれた。武井氏は

その足で小松氏を訪問した。しかし、作曲はまだ出來上つてゐなかつた。一週間程猶豫して貰ひたいとのことであつた。

再度小松氏を訪れた時には、校歌は立派に作曲されて且つ美事に淨書されてあつた。小松氏は、甚だ不出來だが、若しお氣に召したらば木版に起して置かれる方がよろしからう、といふことで、芝愛宕下の彫刻師まで紹介されたのであつた。

先生も非常に滿足された。早速彫刻せよとのことであつた。日ならずして、先生は武井氏を帶同、鷗外博士を訪問して、御禮の言葉を述べられ、銀行爲替とした金百圓を差出された。すると、博士は極くあつさりと、私は作詞料は申受けませぬ、作曲に努力なされた、小松氏に贈呈いたしませうと言はれた。果して其後小松氏から先生宛金子受領の手紙が屆いた。森博士の人格の高潔なことは、今更申すまでもないが、校歌作成に關して、何等の禮物をも受けられなかつた心情には、博士が、先生の人格に傾到された證左とも察せられ、Y校のあらん限り、幾千幾萬の學生に依つて高唱される校歌の上に、美はしくも誇らしき插話を殘したものと言へやう。

『美澤先生』 昭和12(1937)年1月

＜武井武次郎先生による、校歌制定依頼 森鴎外邸訪問時の様子＞

『美澤先生』に登場する武井武次郎先生は、明治33(1900)年から大正14(1925)年まで、体育の教員としてY校に勤務されました。明治37、8(1904、5)年の2年間は日露戦争に従軍し、戦地から日本の美澤先生に宛てて書いた手紙が21通も残されています。

『五十周年記念誌』に寄せた武井先生の「在りし日の美澤先生」という文章の中に、「Y校校歌の昔話」という、校歌を森鴎外邸に依頼しに行く様子が書かれている章がありました。『美澤先生』に記載されていた校歌に関する記述は、この『五十周年記念誌』の武井先生の文章を参考に書かれたものと思われます。

『五十周年記念誌』 昭和8(1933)年3月

に堪へないとくわしく話された事がありました。

Y校校歌の昔話

大正五年四月の候、職員會議の席上で、吾がY校には校歌がないが、之は甚だ物足りない。どうしても校歌を作る必要があるとの職員方から提議があつた其の時校長先生は、廻轉椅子に少し休を左方に傾むけながら至極御機嫌のよい様子で、これは早速考へて見ませう。然し作るとすれば何人に御願ひしたものだらうかとの御諮問で、或る職員は文學博士森林太郎先生は如何でせう。いや森鴎外先生に御願ひが出來ればこれは非常に結構な事であるとの事で其後四五日過ぎて先生は、では鴎外先生の所に出かけて見やうと、お獨り御上京になつた。翌日校長先生は、校歌作成の件は幸ひ御承諾を得た。明後日作歌に就ての材料を御提供する事にお約束して來たから同道してもらいたいとの事で、私がお供をする事になりました。では材料といふのは、どう云ふ物を持參致しませうかと伺ひますと、先生は學校の教育方針はペンと劍ぢやとの仰で、それでは兎に角校訓と學校規則を持參して後は話で傳へる事にしやうとの事であつた。鴎外先生の玄關口には、向つて右端に口徑八寸斗りの錆びた半鐘が釣り下ゆられ、其の下に鐘木が置かれて訪問者は之を打つて、訪問の合圖をする様になつて居た。早速カンカンと鳴らした所が、餘り冴へない音ではあつたが、玄關に見えられたのは、御主人の森閣下で軍服姿のまゝである。ヤーどうぞお上り下さいとの事で鏡がて和服に着更られた森先生と美澤先生とは御對座になり一通りの御挨拶がすみますと、早速校長先生は豫て携帶の校訓と學則を御覽に入れて、そして次の様なお話をされました。これはお話の要領である。苟くも商人たるものは昔の武士の様で、正直で言行一致の決心で行かねばならぬ、失敗しても意氣消沈のせぬ、豪氣なる氣性がなければいけぬ。故に私は正直を身の至寶として、常住に一向不退轉の大なる猛心を持し帝國々旗の進む處世界の商戰場裡に起つて、世界各國人を向ふに廻はし、商氣縱横國家の爲め獻身的に奮闘し彼等外人に一歩も讓らぬ堅實なる立派な商人を養成致し度いと存じますので、其の方針の基に此の校訓を録朝生徒に讀み聞かして居ります。斯様の意味を述べられたものである。私は慨然として恐縮し、先生が今日まで卒業生の海外に出ての發展を奨勵せられたのが解り、ペンと劍とによる海外發展の御理想が判かつた様な次第でした。

鴎外先生は默つたまゝ、うなづかれつゝ、校長先生のお話を傾聽して居られたが、鏡がて除ろに言はれるのには、誠に御同感です。よく判かりました。早速作りませう。三週間計待つて下さいとの事で、私も光榮に浴し責食の御愛應を受けました。三週間の後、私は先生の使者として再び鴎外先生の

御宅に伺ひました。然るに今作りつゝある所であるから、今四五日待つて貰ひ度いとの事であつた。其の時森閣下は私に言はれるのには、余は横濱商業學校の事は豫て聞いて居る。よく一年志願兵を出されるので、學校の御名前は知て居つたが美澤先生にお遇ひしたのは今度が初めてゞある。誠に御立派な方である。よい校長を持たれたものである。生徒の仕合せはどれ程であろう。彼の方ならこちらから進んで作つて上げたいと思ふ。貴方がたもよく御面倒を見て上げて下さい得難い方であるとのお話で、それから五六日經つて更に伺ひました時は已に出來て學習院女子部の小松耕輔先生に作曲をお頼みして送つてあるから、小松氏の所へ行けとの御紹介狀を戴き學習院に伺ひました。小松氏は只今森先生の所からお電話で承知して居ります。今作曲中であるから一週間程お待ちを願ひ度いとの事で後一週間目に伺ひました時は、立派に浮書せられてありました。小松先生は甚だ不出來ですが、若しお氣に召しましたら之を木版に起して置く方が宜ろしかろうと思ふ。彫刻をするならば、芝區愛宕下に上手な彫刻師があるから、私より御紹介致しませうとの事で御名刺を頂きました。

扨て校長先生にお目にかけると非常なるお悦びで早速彫刻せよとのお話があり、此の校歌こそ即ち、今日まで傳つて居るY校の校歌であります。當時校歌の作歌御禮として、百圓を銀行爲替として鄭重にして、私が校長先生のお供をし御禮に森閣下の御邸に伺ひました處、閣下には私は作歌料は申受けぬ、作曲に御努力下さつた小松氏に贈呈致しませうとの事で、果して其の後小松先生より校長先生に宛て金子の受納のお手紙が屆きました。森先生の御人格、當時の有様、私には昔が偲ばれてなりませぬ。皆これ涙の種で御座居ます。

吾々は一生に亘りて長く知、徳、體の修養鍛錬を續けたい

前校長事務取扱 森本泉

Y校諸君

予は學生時代に慶應義塾に居り親しく偉人福澤先生に接するの機會を得、時々演説館（只今三田山上に記念保護建造物として保存せらる）にて先生の演説——といふよりは寧ろ打解けたる談話——を聽き、又時には學友と共に三田臺上に先生の御宅を訪問して修養に關する縱横談を承はり、又居合ひや米搗きの現場などを予等に開放せられてエイ〳〵の勇ましき掛聲高く流汗鍛錬、之れを日課として運動せらるゝ有様を見せて戴き、深き感銘を印したのである。爾來烏兎匆々早くも三十有餘年を過ぎ靜かに往時を回想すれば全く夢の如き心地がするのである。

＜『鴎外全集』の校歌＞

大正 11(1922)年に森鴎外没後、翌大正 12(1923)年より昭和 2(1927)年にかけて、『鴎外全集』が「国民図書株式会社」「春陽堂」「新潮社」の3社共同で組織された「鴎外全集刊行会」から刊行されました。

全 18 巻の全集のうち、大正 15(1926)年に発行された第 6 巻に「横濱商業學校校歌」がおさめられています。

この後、昭和 6(1931)年にふたたび「鴎外全集刊行会」から、そして昭和 13(1938)年、27(1952)年、48(1973)年には「岩波書店」から、新たな『鴎外全集』が発行され、そのすべてにY校の校歌は掲載されていました。

2番の歌詞には、どの『鴎外全集』にも「きそ(ひ)」と振り仮名が振られています。

後記や注釈のページには、「きそ(ひ)」と振り仮名が振られた経緯や典拠などは見当たりませんでした。

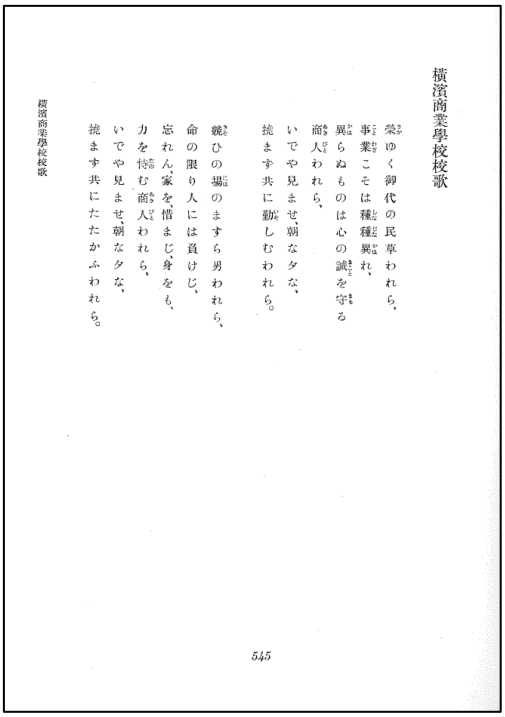
大正 11(1922)年、昭和 6(1931)年、そして昭和 13(1938)年の『鴎外全集』では、一番の歌詞が「異(かは)らぬものは心の誠を守る商人われら」と、「誠」がひとつ足りない状態となっています。昭和 27(1952)年の『鴎外全集』では、「異(かは)らぬものは心の誠　誠を守る商人われら」と正しく直されておりました。

大正期発行の『鴎外全集』の巻末にある、与謝野寛(鉄幹)の「編纂者の言葉」に、『「横濱商業學校校歌」は明治四十年の作である。是れには小松耕輔氏が作曲してゐる。』とありました。実際は大正 5(1916)年です。この記述は昭和 6 年版にも見られ、昭和 13 年版は後記への記述はないものの、題名の「横濱商業學校校歌」の下にかっこ書きで(明治四十年)とありました。

昭和 27 年版にはその題名の下の記述が(大正五年)と直っており、前述のように校歌の歌詞の「誠」の部分も正しいものになっています。昭和 48(1973)年版の後記には『「大正五年作」と昭和二十七年刊の岩波版全集にある。』と書かれ、昭和 27 年版を踏襲したことが見受けられます。

歌詞の三行目、「誠」がひとつ足りません

『鴎外全集　第6巻』 鴎外全集刊行会　大正15(1926)年7月



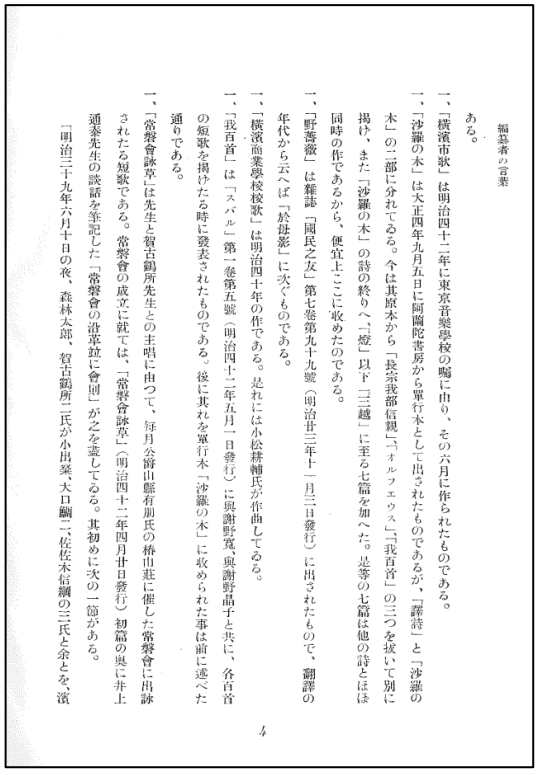
横濱商業學校校歌

榮ゆく御代の民草われら、
事業こそは種種異れ、
異らぬものは心の誠を守る
商人われら、
いでや見ませ朝な夕な、
撓まず共に勤しむわれら。

巍ひの場のますら男われら、
命の限り人には負けじ、
忘れん、家を惜まじ、身をも、
力を恃む商人われら、
いでや見ませ、朝な夕な、
撓ます共にたたかふわれら。

横濱商業學校校歌

545



編纂者の言葉

ある。

一、「横濱市歌」は明治四十二年に東京音樂學校の嘱に由り、その六月に作られたものである。

一、「沙羅の木」は大正四年九月五日に岡鬧陀書房から單行本として出されたものであるが、「譯詩」と「沙羅の木」の二部に分れてゐる。今は其原本から「基督我部信親」「オルフェウス」「我百首」の三つを抜いて別に掲げ、また「沙羅の木」の詩の終りへ「愛」以下「三越」に至る七篇を加へた。是等の七篇は他の詩とは同時の作であるから、便宜上ここに收めたのである。

一、「野菊薄徴」は雜誌「國民之友」第七卷第九十九號(明治廿三年十一月三日發行)に出されたもので、翻譯の年代から云へば「於毬悪」に次ぐものである。

一、「横濱商業學校校歌」は明治四十年の作である。是れには小松耕輔氏が作曲してゐる。

一、「我百首」は「スバル」第一卷第五號(明治四十二年五月一日發行)に與謝野寛、與謝野晶子と共に、各百首の短歌を掲げたる時に發表されたものである。後に其れを單行本「沙羅の木」に收められた事は前に述べた通りである。

一、「常磐會詠草」は先生と智古鶴所先生との主唱に由つて、毎月公爵山縣有朋氏の椿山莊に催した常磐會に出詠されたる短歌である。常磐會の成立に就ては、「常磐會詠草」(明治四十二年四月廿日發行)初篇の奥に井上通泰先生の談話を筆記した「常磐會の沿革並に會則」が之を盡してゐる。其初めに次の一節がある。

「明治三十九年六月十日の夜、森林太郎、智古鶴所二氏が小出粲、大口鯛二、佐佐木信綱の三氏と余とを濱

4

五月に青森縣板柳町の安田秀次郎氏のために揮毫の中に書かれたものである。安田氏は與謝野寛が此の編纂者の言葉の校正を畢らうとする日、卽ち大正十五年七月十二日を以て歿した。氏は歌人にして早くより先生を敬慕する人であつた。

一、此卷は大正十二年の夏に、「帝諡考」全部の植字を終つて居たのであつたが、其年九月の大震火災のために印刷所と共に製版を燒き、其後印刷所の囘復を待つて再び植字に著手したが、猶漢字の活字の不足してゐる理由で進捗せず、また一方に未定稿であつた「元號考」の完成にも時を要し、加ふるに他卷に入れる豫定の韻語が澁れて此卷に收錄せざるを得ぬ狀態となり、俄かに豫定を變更して、此卷の初めに載せたると、大震災後の編者等の境遇にそれぞれ變化する所があつて、原稿の整理に際取つたとのために、此卷は勿論、第五、第十八の二卷までが、非常なる出版の澁滯を結果した。此事は特に讀者諸君の御諒恕をこふ次第である。

一、此卷の韻語に俳句と漢詩とを加へたいと思つたが、紙數の超過したために、第十八卷へ廻し、漢文と併せて收錄する事にした。

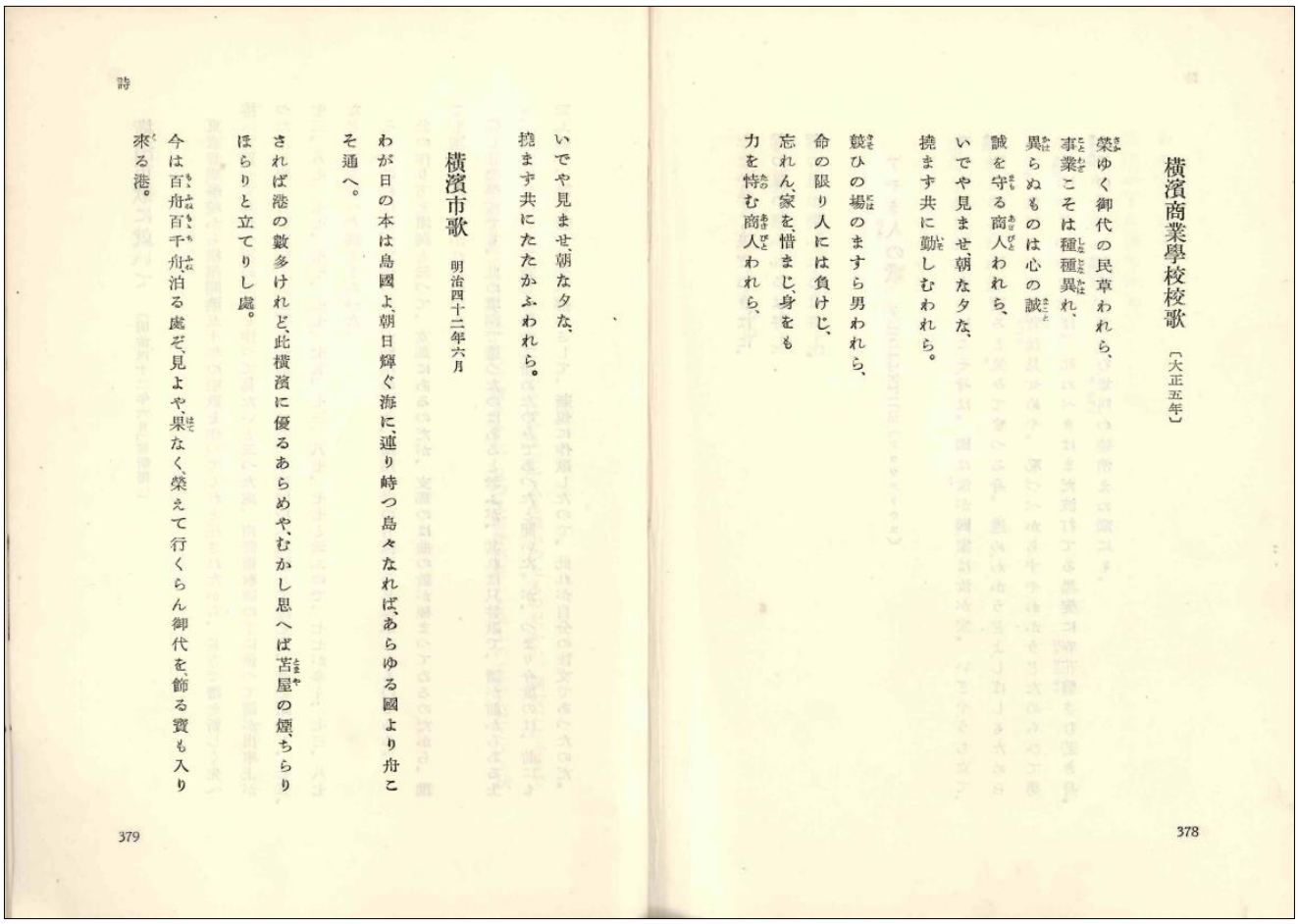
一、此卷は初校再校までを森潤三郎、平野萬里二人が之に當り、三校より五六校までを正宗敦夫、與謝野寛二人が當つた。猶「帝諡考」だけは吉田增藏先生も一囘校正せられたが、「元號考」は吉田先生に校正をこふの時を得なかつた。

一、最後に、此卷の編纂のために前述の吉田增藏、芝葛盛兩先生を初め、森潤三郎、小泉信三、鎗越政一郎、小鳩政二郎、岩田準一、鈴木春浦、其他の諸氏から許多の資料を供給された御厚意を深く感謝する。

編纂者の言葉

7

『鴎外全集　著作篇　第１巻』岩波書店　昭和27(1952)年



横濱商業學校校歌　〔大正五年〕

榮ゆく御代の民草われら、
事業こそは種種異れ、
異らぬものは心の誠、
誠を守る商人われら、
いでや見ませ朝な夕な、
撓まず共に勤しむわれら。

競ひの場のますら男われら、
命の限り人には負けじ、
忘れん家を惜まじ身をも
力を恃む商人われら、

いでや見ませ朝な夕な、
撓まず共にたたかふわれら。

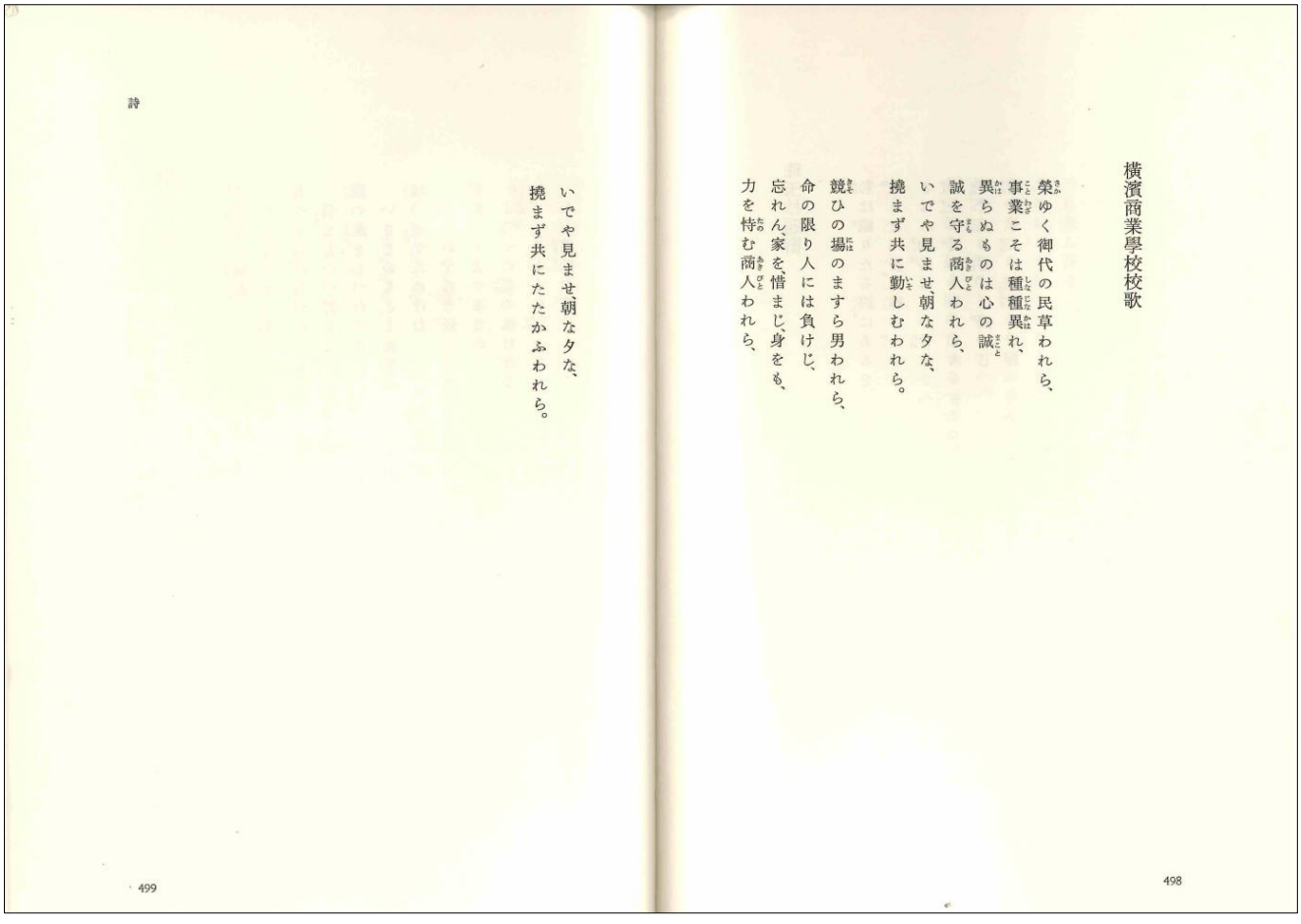
横濱市歌　明治四十二年六月

わが日の本は島國よ、朝日輝く海に、連り峙つ島々なれば、あらゆる國より舟こそ通へ。

されば港の數多けれど、此横濱に優るあらめや、むかし思へば苫屋の煙、ちらりほらりと立てりし處。

今は百舟百千舟、泊る處ぞ、見よや、果なく榮えて行くらん御代を飾る寶も入り來る港。

『鴎外全集』19巻　岩波書店　昭和48(1973)年



横濱商業學校校歌

榮ゆく御代の民草われら、
事業こそは種種異れ、
異らぬものは心の誠、
誠を守る商人われら、
いでや見ませ朝な夕な、
撓まず共に勤しむわれら。

競ひの場のますら男われら、
命の限り人には負けじ、
忘れん家を惜まじ身をも、
力を恃む商人われら、

いでや見ませ朝な夕な、
撓まず共にたたかふわれら。

＜小泉信三氏による「校歌のこと」＞

小泉信三氏は慶應義塾大学の第7代塾長を務めた経済学者で、美澤進先生の親戚でありました。

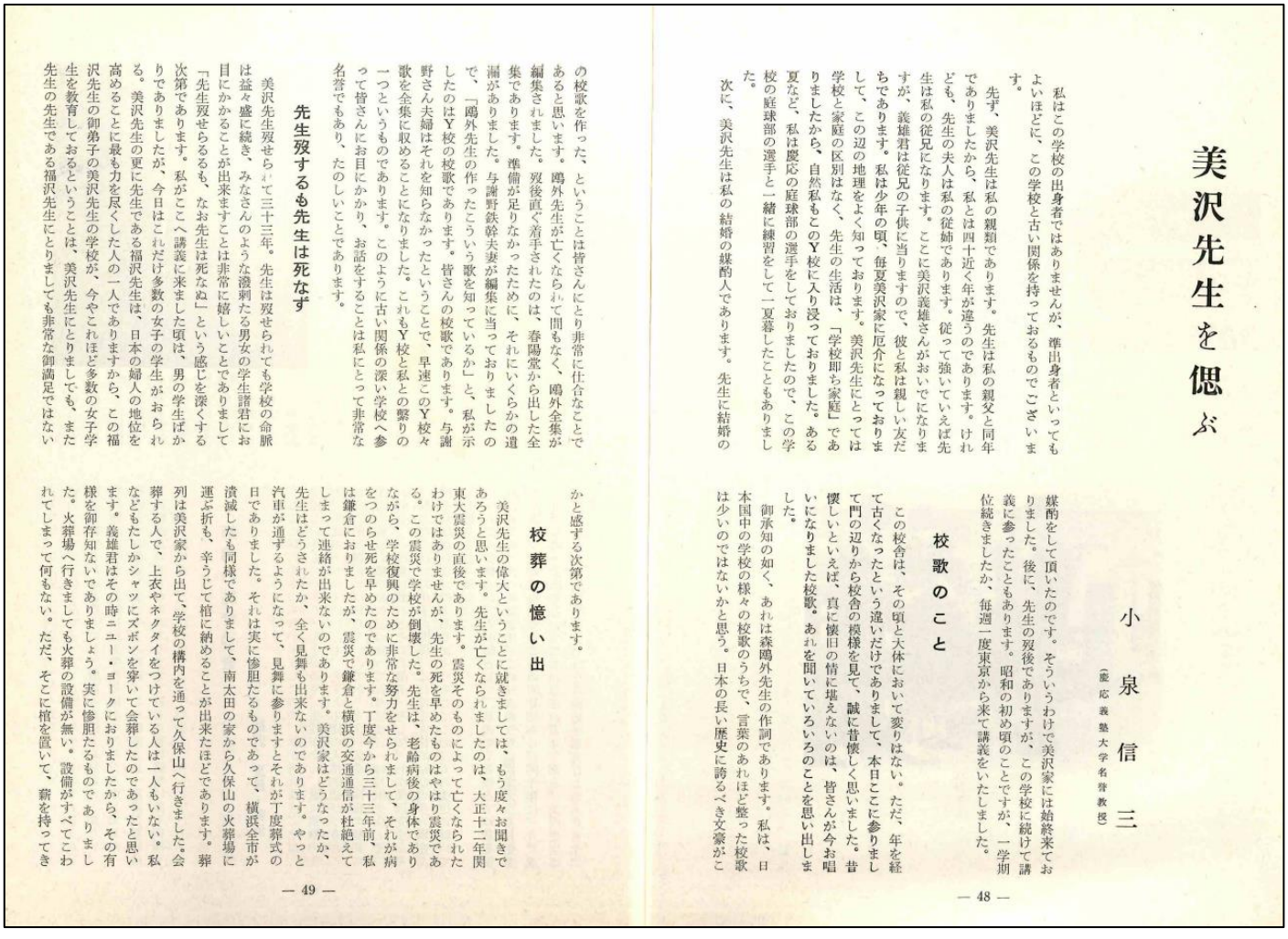
『Y校八十周年記念誌』に寄せた文章の中に、校歌が『鴎外全集』に掲載されるに至った経緯として、森鴎外没後すぐに春陽堂から出版された『鴎外全集』に校歌がなかったので、編集にあたっていた与謝野鉄幹（晶子）夫妻に小泉信三氏自ら「鴎外先生の作ったこういう歌を知っているか」とY校の校歌を示した、と書かれています。

春陽堂単独で発行された『鴎外全集』は見当たらず、「春陽堂」と「新潮社」と「国民図書株式会社」の三社合同で発行された「鴎外全集刊行会」による一番古い『鴎外全集』に、すでにY校の校歌は掲載されています。

その巻末の、与謝野寛（鉄幹）の言葉の中に、『鴎外全集』第 6 巻は大正 12(1923)年夏にはほとんど出来上がっていたが 9 月の関東大震災により印刷所が焼けてしまったため出版が延期になり、15(1926)年の 7 月にようやく発行できたことが記されています。そして、おわりには「最後に、此巻の編纂のために～～～小泉信三、～～～其他の諸氏から幾多の資料を供給された御厚意を深く感謝する。」という謝辞がありました。

『八十周年記念誌』の小泉信三氏の文章は、昭和 30 年 9 月 16 日の美澤進先生三十三回忌法要の際に講堂にて行われた講演会で語られたもので、『鴎外全集』のくだりが実際どうであったのかわかる資料は、今のところ見つけられませんが、この巻におさめられた詩や短歌などの小さな作品のうちの最後のほうにY校の校歌があることや、謝辞に小泉信三氏の名前があることなどから、震災で出版が延期になっているあいだに編集段階の原稿を手にする機会があった小泉信三氏が与謝野夫妻に校歌の話を持ち掛けたのではないか、などと新しい想像が膨らみました。

『Y校八十周年記念誌』昭和37(1962)年



美沢先生を偲ぶ

小泉信三
（慶応義塾大学名誉教授）

私はこの学校の出身者ではありませんが、準出身者といってもよいほどに、この学校と古い関係を持っておるものでございます。

先ず、美沢先生は私の親類であります。先生は私の親父と同年でありましたから、私とは四十近く年が違うのであります。けれども、先生の夫人は私の従姉であります。従って強いていえば先生は私の従兄になります。ここに美沢義雄さんがおいでになりますが、義雄君は従兄の子供に当りますので、彼と私は親しい友だちであります。私は少年の頃、毎夏美沢家に厄介になっておりまして、この辺の地理をよく知っております。美沢先生にとっては学校と家庭の区別はなく、先生の生活は、「学校即ち家庭」でありましたから、自然私もこのY校に入り浸っておりました。ある夏など、私は慶応の庭球部の選手をしておりましたので、この学校の庭球部の選手と一緒に練習をして一夏暮したこともありました。

次に、美沢先生は私の結婚の媒酌人であります。先生に結婚の媒酌をして頂いたのです。そういうわけで美沢家には始終来ておりました。後に、先生の歿後でありますが、この学校に続けて講義に参ったこともあります。昭和の初め頃のことですが、一学期位続きましたか、毎週一度東京から来て講義をいたしました。

校歌のこと

この校舎は、その頃と大体において変りはない。ただ、年を経て古くなったという違いだけでありまして、本日ここに参りまして門の辺りから校舎の模様を見て、誠に昔懐しく思いました。昔懐しいといえば、真に懐旧の情に堪えないのは、皆さんが今お唱いになりました校歌。あれを聞いていろいろのことを思い出しました。

御承知の如く、あれは森鴎外先生の作詞であります。私は、日本国中の学校の校歌のうちで、言葉のあれほど整った校歌は少いのではないかと思う。日本の長い歴史に誇るべき文豪がこの校歌を作った、ということは皆さんにとり非常に仕合なことであると思います。鴎外先生が亡くなられて間もなく、鴎外全集が編集されました。歿後直ぐ着手されたのは、春陽堂から出した全集であります。準備が足りなかったために、それにいくらかの遺漏がありました。与謝野鉄幹夫妻が編集に当っておりましたので、「鴎外先生の作ったこういう歌を知っているか」と、私が示したのはY校の校歌であります。皆さんの校歌であります。与謝野さん夫婦はそれを知らなかったということで、早速この Y 校々歌を全集に収めることになりました。これもY校と私との繋りの一つというものであります。このように古い関係の深い学校へ参って皆さんにお目にかかり、お話をすることは私にとって非常な名誉でもあり、たのしいことであります。

先生歿するも先生は死なず

美沢先生歿せられて三十三年。先生は歿せられても学校の命脈は益々盛に続き、みなさんのような溌剌たる男女の学生諸君にお目にかかることが出来ますことは非常に嬉しいことでありまして「先生歿せらるるも、なお先生は死なぬ」という感じを深くする次第であります。私がここへ講義に来ました頃は、男の学生ばかりでありましたが、今日はこれだけ多数の女子の学生がおられる。美沢先生の更に先生である福沢先生は、日本の婦人の地位を高めることに最も力を尽くした人の一人でありますから、この福沢先生の御弟子の美沢先生の学校が、今やこれほど多数の女子学生を教育しておるということは、美沢先生にとりましても、また先生の先生である福沢先生にとりましても非常な御満足ではないかと感ずる次第であります。

校葬の憶い出

美沢先生の偉大ということに就きましては、もう度々お聞きであろうと思います。先生が亡くなられましたのは、大正十二年関東大震災の直後であります。震災そのものによって亡くなられたわけではありませんが、先生の死を早めたものはやはり震災である。この震災で学校が倒壊した。先生は、老齢病後の身体でありながら、学校復興のために非常な努力をせられまして、それが病をつのらせ死を早めたのであります。丁度今から三十三年前、私は鎌倉におりましたが、震災で鎌倉と横浜の交通信が杜絶えてしまって連絡が出来ないのであります。美沢家はどうなったか、先生はどうされたか、全く見舞も出来ないのであります。やっと汽車が通るようになって、見舞に参りますとそれが丁度葬式の日でありました。それは実に惨胆たるものであって、横浜全市が潰滅したも同様でありまして、南太田の家から久保山の火葬場に運ぶ折も、辛うじて棺に納めることが出来たほどであります。葬列は美沢家から出て、学校の構内を通って久保山へ行きました。会葬する人で、上衣やネクタイをつけている人は一人もいない。私などもたしかシャツにズボンを穿いて会葬したのであったと思います。義雄君はその時ニュー・ヨークにおりましたから、その有様を御存知ないでありましょう。実に惨胆たるものでありました。火葬場へ行きましても火葬の設備が無い。設備がすべてこわれてしまって何もない。ただ、そこに棺を置いて、薪を持ってき

＜「彰徳歌」について＞

Y校の三十周年を記念して作られた『横濱商業學校誌』明治45(1912)年に、森林太郎(鴎外)が美澤先生の還暦を祝って作ったという彰徳歌が収められています。『Y校アーカイブ vol.12「横濱商業學校誌」』でも取り上げたこの三十年誌の「第五章　受賞」の項に、「明治四十二年十月美澤校長彰徳式に於ける彰徳の歌　森林太郎作歌」がありました。明治42(1909)年に作られたということは、大正5(1916)年の校歌よりもずっと前に、森鴎外によって美澤先生のために歌が作られていたということです。

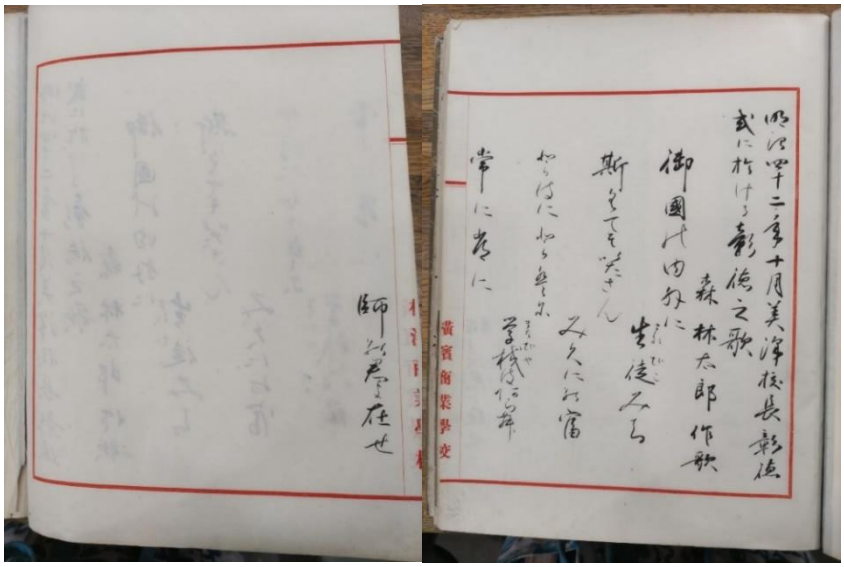
「美澤先生彰徳会記」という記録の冊子に彰徳歌係として3名の名があり、続くページに「彰徳歌係は数回出京して、森鴎外先生の歌作と、東京音樂學校教授南能衛先生の作曲とを請ひ、横濱縣立女學校音樂科教授草川宣雄先生を招聘し、在校生をして、練習せしめたり。」と書かれています。どのような伝手で依頼したのかが書かれたものは見つけられませんでした。

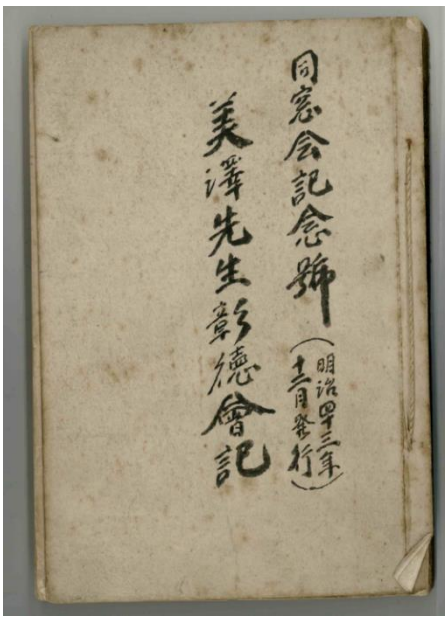
岩波書店から昭和13(1938)年、昭和27(1952)年、昭和48(1973)年に刊行された『鴎外全集』には、校歌だけでなく、「美澤校長彰徳歌」が掲載されています。大正期や昭和6年発行の「鴎外全集刊行会」から発行された『鴎外全集』にはこの彰徳歌の掲載は見られませんが、昭和13年版の後記に、「本全集に於て新に収録し得たものである」と書かれています。

筆で書かれた『横濱商業學校誌』では「生徒(まなびこ)」となっている振り仮名が、『鴎外全集』では「をしへご」となっているなど、違いが見受けられます。

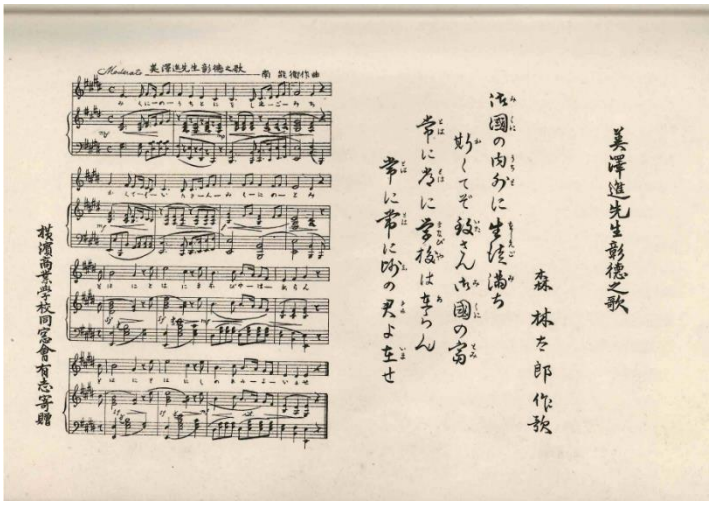
「横濱商業學校誌(三十年誌)」 明治45(1912)年



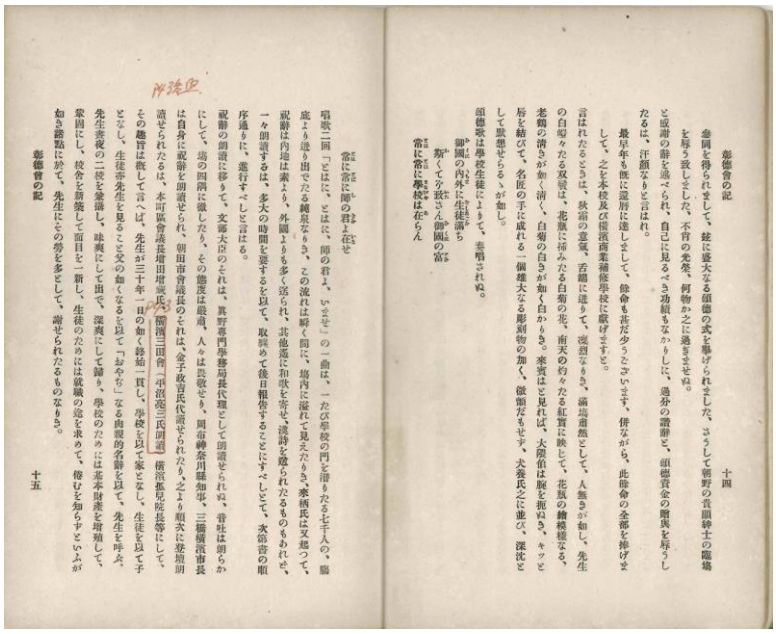




「美澤先生彰徳会記」 明治43年12月



「美澤先生彰徳会記」 明治 43 年 9 月
（何度も改訂されている様子、こちらは 9 月版）



彰徳會の記

十四

叡聞を得られまして、茲に盛大なる頌徳の式を擧げられました、さうして朝野の貴顯紳士の臨場を辱う致しました、不肖の光榮、何物かこれに過ぎませぬ。

と感謝の辭を述べられ、自己に見るべき功績もなかりしに、過分の讃辭と、頌徳資金の贈呈を辱うしたるは、汗顔なりと言はれ。

最早年も既に還暦に達しまして、餘命も甚だ少うございます、併ながら、此餘命の全部を捧げまして、之を本校及び福澤商業補修學校に獻げますと。

言はれたるときは、秋霜の意氣、舌端に迸りて、滿場肅然として、人無きが如し、先生の白髪々々たる双鬢は、花瓶に挿みたる白菊の花、南天の枝々たる紅實に映じて、花瓶の繪模様なる、老鶴の清きが如く消く、自菊の白きが如く自かきく。來賓はと見れば、大隈侯は腕を振ぬき、ヤッと袖を結びて、名匠の手に成れる一個雄大なる彫刻物の加く、微動だもせず、大発氏之に並び、深沈として默想せらるゝが如し。

頌徳歌は學校生徒にまして、奏唱されぬ。

「御國の内外に生徒諸
　斯くて吾校さん御國の富
　常に常に學校は在らん」

彰徳會の記

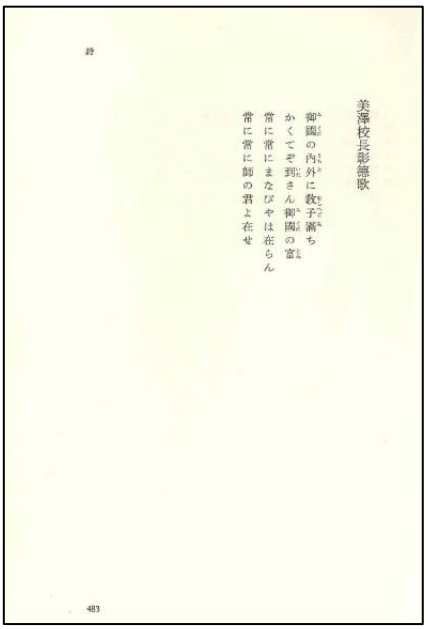
十五

「常に常に師の君よ在せ

碧歌二回「とはに、とはに、師の君よ、いませ」の一曲は、一たび學校の門を潜りたる七千人の、腦底より迸り出でたる純泉なるも、その流れは緩く間に、場内に溢れて見えたるも、來賓氏は又想つて、親睦は内地は素より、外國よりも多く弦られ、其他萬に和歌を寄せ、漫詩を贈られたるものもあれば、一々朗讀するは、多大の時間を要するを以て、取調めて後日報告することにすべしとて、次第書の順序通りに、進行すべしと言はる。

祝辭の朗讀に移りて、文部大臣のそれは、眞野專門學務局長代理として朗讀せられぬ、音吐は朗らかにして、場の四隅に徹したり。その態度は最適當、人々は長敬とり、岡右神奈川縣知事、三橋横浜市長は自身に祝辭を朗讀せられ、朝田市會議長のそれは、金子敎育氏代讀せられたり、之より順次に登壇朗讀せられたるは、本可區會議長增田增兵氏、關澤三四郎氏「平沼亮三氏同遠」横濱瓦斯兒院長等にして、その趣旨は概して言へば、先生が三十年一日の如く修如一貫し、學校を以て家となし、生徒を以て子となし、生徒亦先生を見ること父の如くなるを以て「おやこ」なる眞摯的名辭を以て、先生を呼ぶ、先生亦我の二校を愛撫し、味爽にして出で、深夜にして歸り、學校のために基本財産を增殖して衆困にし、校舍を新築して面目を一新し、生徒のためには就職の途を求めて、徳化を知らずといふが如き缺點に於て、先生にその勞を多とし、謝せられたるものなりき。

『鷗外全集』 第 19 巻　岩波書店
昭和 48(1973)年



詩

美澤校長彰德歌

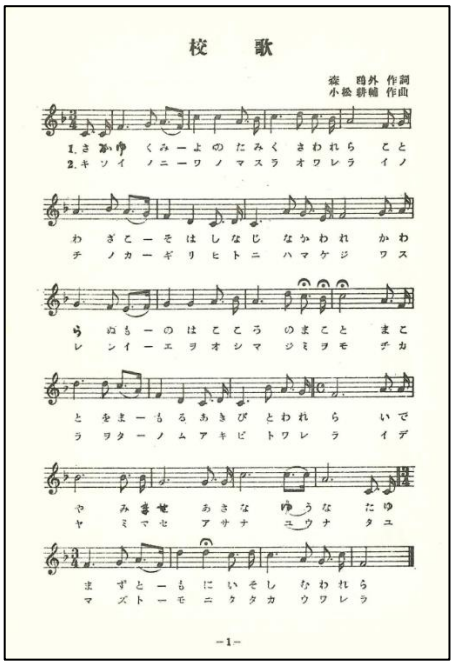
御國の内外に敎子滿ち
かくてぞ到さん御國の富
常に常にまなびやは在らん
常に常に師の君よ在せ

483

＜「応援歌集」の校歌＞

『Y校アーカイブ vol.10「応援歌」』で取り上げた応援歌集を確認しました。所蔵している３種類の応援歌集のうち、昭和 4(1929)年のものには振り仮名がなく、楽譜もありません。1980 年代頃の発行のものには楽譜も歌詞も掲載されており、どちらも「きほひ」となっています。楽譜は１番の歌詞はひらがな、２番はカタカナで書かれています。1965 年頃の発行と思われる「校歌・應援歌」と表紙に書かれたものには、楽譜のみ掲載されています。
こちらも１番はひらがな、２番はカタカナで表記されており、「キソイ」となっていました。
この『Y校アーカイブ vol.10「応援歌」』の中で取り上げたレコードのA面の１曲目に、校歌が入っています。ケースの裏面に書かれた歌詞には「きほ(ひ)」と振り仮名が振ってあり、歌も「きおいのにわの～」と歌っています。
カラオケや YouTube の音源も、このレコードを活用しているものがほとんどではないかと思われます。

『校歌・應援歌』 1965 年頃？
こちらの応援歌集に
「キソイ」のふりがなが見られます



校　歌

詞曲作
森小松　鴎外鼾輔

1.さあゆけ　くみーよのたみくさわれら　ことイノ
2.キソイ　ノニーワノマスラオワレラ　イノ

わ　ぎこーそはしなじなかわれかわス
チ　ノカーギリヒトニハマケジワス

ら　ぬもーのはこころのまことまこカ
レ　ンイーエヲオシマジミヲモザ

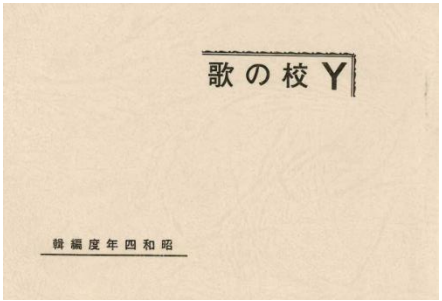
と　をまーもるあきびとわれらいでデ
ラ　ヲタームアキビトワレライデ

や　みませあさなゆうなたゆ
ヤ　ミマセアサナユウナタユ

ま　ずとーもにいそしかわれらラ
マ　ズトーモニイタタカウワレラ

-1-

『Y 校の歌』(復刻版)
昭和4(1929)年
(復刻版制作年不明)



歌の校Y

韓編度年四和昭



校　歌

一、榮行く御代の　民草我等、
事業こそは　品々變れ、
變らぬものは　心の誠、
誠を守る　商人我等、
いでや見ませ　朝な夕な、
たゆまず共に　いそしむ我等。

二、競ひの庭の　丈夫我等、
命の限り　人には負けじ、
忘れん家を　惜しまじ身をも、
力を賴む　商人我等、
いでや見ませ　朝な夕な、
たゆまず共に　戰ふ我等。

『横浜市立横浜商業高等学校
校歌・応援歌』(レコード)
昭和 39(1964)年 12 月



横浜市立 横浜商業高等学校生徒会
応援団・合唱部

1964.12.21 GRAMMOPHON STUDIO



横浜市立横浜商業高等学校校歌・応援歌

MI-1020

＜「Y校出身の先生方」が歌う校歌＞

現在Y校に在籍されている、1979 年から 2018 年に卒業された 8 名のY校出身の先生方に確認したところ、「きそい」と歌っていたという方がほとんどで、「きおい」と歌っていたのはY校定時出身の先生おひとりだけでした。
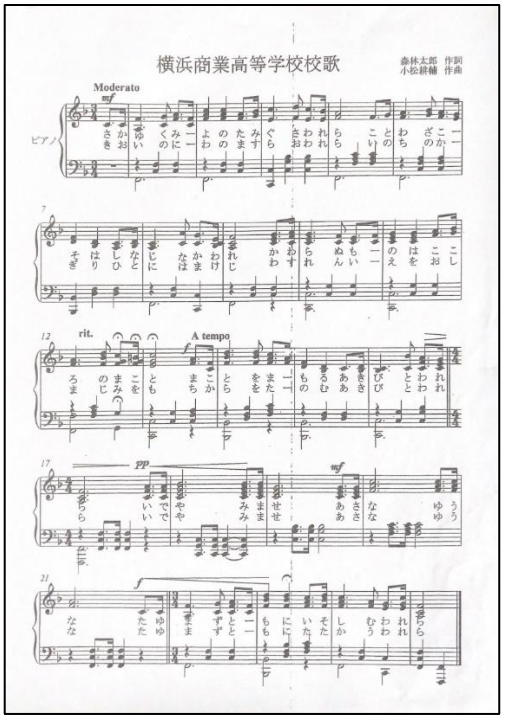
理容･美容のY校別科では毎週の朝礼で音源を使って「きおい」と歌っているそうです。お話をうかがった先生方の中には、高校時代の記憶は定かではないので、といったことや、教員生活が長くなり何度も校歌を歌ううちに、かつてはどう歌っていたかわからなくなった、という話もありました。校歌は野球応援などでよく歌うが、1番のみのことが多いので、式典などで2番を歌う場面になると急にトーンダウンしてしまう、といった、身に覚えがあるような意見もありました。また、「競いの場の ますらを我ら」は、「お互いにライバルとして学校の中で過ごしてきた私たち」という意味だと思って歌っています」と、校歌への思いなども寄せられています。

＜辞書における「競ひ」の扱い＞

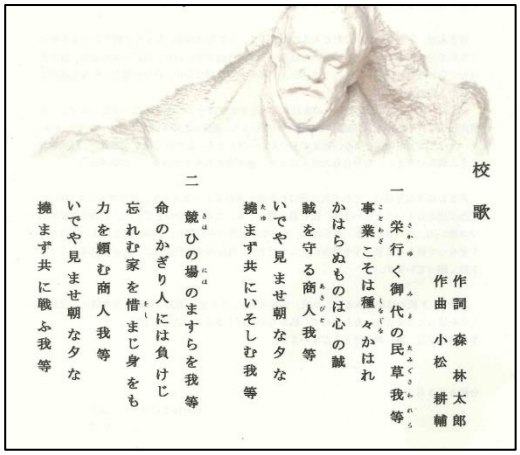
『岩波古語辞典補訂版』(岩波書店 昭和 49 年)によると、「競ひ」は「きそひ」「きほひ」それぞれで立項されており、「きほひ」には「勢い込んでわれ先にする意。類義語キソヒは少しでも相手にぬきんでようとする意」とありました。「きほひうま」や「きほひぐち」という言葉もあり、「きほひ」は競うよりも勢いの部分の印象が強い語として使われているようです。現代語の辞書には『広辞苑(第 7 版)』新村出編 岩波書店 2018 年、『新選国語辞典(第八版)』金田一京助ほか編 小学館 2002 年など、Y校で所蔵しているほとんどの辞書に「きおい」の語がありました。歴史的仮名遣いの「きほひ」からきた語であるという表記も、どの辞書にもありました。

＜「音楽の授業」の校歌＞

音楽の先生にお聞きしたところ、音楽の授業では、「楽譜の通り」に指導しており、「きおい」と歌っています、ということでした。この楽譜がいつから使われているものなのかは判明していません。



現在、音楽の授業で使用している楽譜（2025年5月確認）


校歌

作詞 森林太郎
作曲 小松耕輔

一 栄行く御代の民草我等
事業こそは種々かはれ
かはらぬものは心の誠
誠を守る商人我等
いでや見ませ朝な夕な
撓まず共にいそしむ我等

二 競ひの場のますらを我等
命のかぎり人には負けじ
忘れむ家を惜まじ身をも
力を頼む商人我等
いでや見ませ朝な夕な
撓まず共に戦ふ我等

式典で配布されている校歌の歌詞

＜「きそい」か「きほひ(きおい)」か＞

『鴎外全集』と「応援歌集」、そして多くのY校生の記憶のなかにある歌詞は「きそい」でした。

当時、森鴎外から受け取った校歌に、この「競ひ」の部分にどのような振り仮名があったのかがわかる資料はありませんでした。Y校図書館で所蔵している校歌の振り仮名が掲載された一番古い資料の「Y校五十周年記念誌」昭和8(1933)年では「きほひ」となっておりました。

校歌ができた大正5(1916)年のころの「競ひ」の読み方は「きほひ」が一般的だったのかもしれません。

時代が進み「競い」と書かれたものを読むときに「きそい」が一般的になり、「きおい」は古語となって、漢字で書かれた歌詞を渡されて歌っていくなかで、「きそい」と歌うようになってきたのではと思われます。